

# 陽気だより

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます

No. 53 2011.8.15

第6号 (24年10月号) から

「陽気」は、昭和24年4月の創刊、今年で62年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

## 明るい陽ざしを浴びて

柏木庫治

うちの部内で、千住にあり  
戦災で焼けた教会の話である。  
その会長は六十八歳の婦人  
だが意気軒昂、信者もよく理  
が治まっていたから、終戦に  
なるとすぐさま復興の意気に  
奮い立ち、焼け残った一区画  
に、余り大きくはないが立派  
に教会として使えるだけの家  
が御守護になった。

ところが、初めての契約で  
はすぐ出るはずになっていた  
借家人が、一向に出ないので  
ある。それも三人。三十三歳  
の男と、六十一歳のお婆さん  
は、これは、出てくれるめど  
がないわけではないが、七十  
二歳のお婆さんというのが全  
くの天涯孤独で、誰も世話を  
する者がいないのである。か  
らだはまだ足を除けば、至極  
達者で、お針が出来それでよ  
すぎをしているくらいだから  
手のかかるわけではないが、  
このお婆さんだけは、どこと  
いって行くあてもなさそうで

ある。行李三ツに自分の着て  
寝る布団一組、それに粗末な  
がらも客間布団一組が全財産、  
行李の着物が、インフレの昂  
進と同時に段々少なくなつて  
ゆき、家を買ってから足かけ  
二年経った。その間には、会  
長の胸のうちには実に様々の  
思いが去来し、当世の借家人  
氣質を随分咎めてもみたが、  
結局大きな気持ちでどかんと  
定まって来た。

ある日のこと、いよいよ心  
細くなつたのか、件のお婆さ  
ん、聞かせるともなく会長に、  
「……売るものが無くなつた  
ら、あたしや、養老院に行き  
ますよ。あるうちに死んだら  
まあ骨ぐらいなんとか拾って  
やってくださいヨ……」

不幸な人のわびしい練り言  
を聞くと、会長の胸にはあら  
ゆる経緯を越えた救け心が湧  
然とわき起こり、すぐに私の  
ところに飛んできたのである。  
ひと通りの話がすんで、どう  
したらこのお婆さんを救けら  
れるでしょうかというわけで  
ある。  
「ヨメにやりなさい」

「えッ！ ヨメに？ あのう、  
お嫁さんに？」  
「そうだよ」  
「七十二ですよ！」  
「女なら七十二でもお嫁にゆ  
けるさ」

暫し呆然たるその会長の顔  
をみて、私は急に自分の言っ  
たことのおかしさに気がつき、  
思わず呵呵大笑した。  
その事があってから、半年  
余り経ち、昭和二十三年もそ  
ろ初冬にいらかけた十一  
月のある日、匂いがかかって  
その教会にひとりの老人が参  
拝した。付近の鉄工所で留守  
番かたがた軽い仕事をやらせ  
てもらって、なんとか食べて  
いたのである。御丁寧にも二  
回焼かれて、それこそ文字通

りのキタキリ雀、それにたつ  
たひとりの娘があるが、親の  
ところへ寄りつこうともしな  
いという。あれやこれや、お  
爺さんの愚痴たらたら聞かさ  
れているうちに、会長の胸に、  
ふと私の言ったことが思い出  
されたのである。

小春日和とも言えるような  
ある日、お爺さんのところを  
たずねた会長は、ゴツンゴツ  
ンと煙管の雁首をやけにたた  
きながら、さんざん愚痴を聞  
いた揚句、やんわりと切り出  
してみたのである。

「ねえおじいさんや、やつぱ  
り、こうしておひとりでお暮  
らしになつておるんじやあ、  
御不便でしょうねえ……」  
「ふん、まあこうやって、飼



「陽気」創刊60年記念出版  
早くも重版!

# 人生終らし

じんせいにおわりなし

## 父 柏木庫治を語る

3人の兄妹によるてい談  
「陽気」掲載記事  
柏木庫治小伝

「陽気」編集部編  
四六判並製・280頁  
定価=1,260円(税込)

図書出版 養徳社  
天理市川原城町388  
☎(0743)62-4503  
http://yotokusha.com/

「い殺してもらっただけさあね」  
「ときにおじいさん、今のま  
まではとても、御飯を炊くに  
しても洗濯するにしても大変  
だから、お嫁さんと言っちゃ  
あおかしいですが、茶飲み友  
達のような気持ちでつきあえ  
る人をもらったらどうですか」  
そのとき、お爺さん、雁首  
をたたくのをやめて首をあげ、  
「来てくれる人がいるかね」  
と真顔になって言うので、  
これは大いに思召しがあるな  
と見てとった会長は、例のお  
婆さんの話を持ち出すと、今  
度は七十七のお爺さん、ゴツ  
ンゴツンとつづけさまに吐月  
峰をたたきながら、はつきり  
と首を縦に振ったのである。

「ねえ、こういう話があるん  
だけど、お婆さん、お嫁にい  
ったらどうですか」  
と持ち出すと、豈図らんや、  
七十二のお婆さんが、これま  
たポーンと両の頬に紅葉を散  
らして、畳のへりをむしって  
は、娘っ子のような声で、  
「おまかせします」  
という始末。話ほとんどん  
拍子をもうひとまわり先まわ  
った早さで決まりそうになっ  
たところが、お爺さんの雇い  
主が、  
「お前だけなら、なんとかし  
てやるが、死んだあとでお婆  
さんの世話まではしてやれな  
い」という。そこで会長は、  
じかに雇い主にあつて、  
「あとは教会で引き受けます。  
老い先短い者に、少しでも楽  
しみをさせたいから」という  
ことで話をつけた。それでい  
よいよ本決まりとなつて、善  
は急げということになり、年  
も追っていたけれども、十二  
月の吉日を選んで、雇い主か  
ら出た酒五合と金五百円の費  
用で、目出度く神前結婚を、  
いとも厳かにすますと、新郎  
はさっそくリヤカーに新婦と  
荷物をのせていとも颯爽と狭

いながらも楽しい我が家に引  
き取ったのである。  
年の瀬もあけて正月の大祭  
の当日、キタキリ雀だったお  
爺さんも、お婆さんの丹精に  
なる着物をリユウと身につけ  
お婆さんをリヤカーにのせて  
参拝に来たが二人ともすこぶ  
る円満で嬉しそうだった。  
そつとお婆さんをものかげ  
に呼んで、  
「お婆さんよかったねえ、辛  
抱が出来そうですか」  
ときくと、今度はお婆さん、  
真顔で、  
「爺さんは、夜な夜なうるさ  
い人かと思つたら、それほど  
でもないのです、私辛抱出来ま  
すよ」と答えた。  
乗せて引く者、乗って引か  
れる者、この道は、わしはも  
う年取つたとか、もうだめだ  
とかいう道ではないぜ、とい  
われた教祖のお言葉が、しみ  
じみと胸に溢れて、明るい陽  
ざしを背一杯に浴びながら、



鼓笛オンパレ 磐城平大の鼓笛隊



リヤカーで帰ってゆく二人の  
後姿が、千住大橋の上を小さ  
くなつてゆくまで立ちつくし  
ていました。と、その会長が  
晴れやかな顔で私に語った。

### 養徳社 よもやま話

〇……「陽気」を送付される封筒が変わります。経費削減のため少し小さくして、表の「第三种郵便」などの印刷を省かせていただきます。ご了承ください。

郵便局から第三种郵便で送られる場合は、表に「第三种郵便」と表記し、また開封が条件ですので、中身が見えるようにしてください。くわしくは最寄りの郵便局にお尋ねください。よろしくお願いたします。

〇……今春、花のタネをいただいたのがきっかけで、花を育てるようになりました。

数個の植木鉢に種を蒔き、水をやります。簡単なことですが一からやるとなると、なにかもがお勉強。すると、最近、被災地への手だすけにもなるとヒマワリの種六個をいただきました。

早速持ち帰って三つの鉢に二個ずつ分けて蒔きました。同じく会社の花壇に蒔かれた種が芽を出して二日目、私の鉢にも芽が出ました。毎日が楽しみにになりました。なにか人育て子育てに似ていると実感しています。

この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用くださいますよう、お願い申し上げます。

養徳社